

## 食の安全／トレサビだけでは守れない

谷口吉光（秋田県立大学）

最近改めて「食の安全」に注目が集まっている。牛海綿状脳症（BSE）、偽装表示、無登録農薬、鳥インフルエンザなどの問題が続いたため、食の安全に不安を感じている人は多いだろう。政府も食の安全対策に本腰を入れ始めた。02年に農水省が発表した「農と食の再生プラン」は、それまで生産者寄りだと批判された農政を「消費者に軸足を移した農政に転換する」と宣言して話題となった。

政策の改革だけでなく、食の安全を守るために新しい方法が導入された。「トレーサビリティ」（トレサビ）という聞き慣れない外来語が農家の間で使われるようになったのもこの2～3年のことだ。これは、例えば消費者が買った野菜に何か問題があった時（例えば使ってはいけない農薬が残留していた時）、その野菜の流通経路を逆にたどり、最後にはそれを栽培した畑や農家を突き止めることができる仕組みをいう（「追跡可能性」などと訳されている）。大量生産・大量流通の時代に一つの野菜の素性を畑までたどれるなんて想像もできないことだったが、最近のIT技術の進歩によって、ある程度それができるようになったのだ。最近では、栽培や流通の情報を入力した小さなチップを農産物に付けて、読み取り機械にかけるとその農産物の情報が即座に見られるという技術も開発されている。

しかし、そのような仕組みを作ればそれで食の安全を確保できるといえるのだろうか。先日ある町で講演した時、そのことを聴衆の人たちに聞いてみた。「できない」と即座に答えた女性がいた。「だって信用できないもの」というのがその理由だった。私はこの女性の答えは鋭いと思った。食の安全を脅かす原因は様々あるが、その根底には生産者や行政に対する「不信」がある。信頼関係が壊れてしまったのだ。だから生産者や行政がいくら基準や表示を工夫しても、それだけでは消費者の心をとらえることはできない。今必要なのは、生産者と消費者の信頼関係を回復させることなのだ。

しかし、信頼回復という仕事は生産者だけの責任ではない。消費者にもやってほしいことがある。それは農業や食生活についてもっと勉強することだ。「農薬は使わないでほしい」という消費者はたくさんいるが、農薬について少しでも勉強している人はほとんどいない。『無登録農薬はなぜつかわれた』（日本評論社）という本を見ると、無登録農薬問題の背景には消費者の強い要求があったことが分かる。野菜でも果物でも、甘くて大粒で傷一つないきれいなものが店に並ぶ。農薬を使わなければできはしない。しかし同じ農薬を使い続けると、病害虫に抵抗性がつき農薬が効かなくなる。そこで毒性の強い農薬、普段使ったことのない農薬が必要とされる。それが無登録農薬問題の隠れた原因だということだ。

目新しい横文字や小手先の技術で食の安全を守ることはできない。生産者と消費者が交流しながら学びあえるような場作りが必要だろう。

（朝日新聞「あきた時評」 2004年10月2日掲載分を加筆・修正した）